

だから私は ピアフを歌う

俳優 大方 斐紗子



シャンソンの女王エディット・ピアフ。その声と歌に魅せられた俳優の大方斐紗子が9月12日、東京の日本橋劇場で「エディット・ピアフに捧ぐ」と題した公演に挑む。「ピアフの歌には、どんな苦しみをもはねどばす強靱な精神がある。だから私はピアフを歌うのです」

絶望救ってくれるのは愛

NHKの「あまちゃん」「八重の桜」、映画に舞台。何を演じても強い存在感を放つ。時にわびしく、時に突き抜けて明るく、様々な老境を軽やかに演じる名優だ。この7年、ピアフを各地で歌い続けてきた。

約30年前、家族の看病や生活苦にくたびれ果て、死を意識した。そんな折、ピアフのレコードに出会い、友人にも背中を押され、自ら歌いはじめた。ピアフという遠くの閃光を見据え、歩みを共にしてきたのが、大方の歌の自然さにはれ込んだ音楽プロデューサーの上田知華だ。

「大方さんは俳優だから、一曲一曲の世界観の表現に全力を挙げる。ただ私は、大方さんがどの曲を歌っても、それが『大方斐紗子』であれば、それでいいのだと思う」

その真意を、大方も受け止める。「俳優を何十年もやり、自然にわかったことは、演じることよりただそこに存在していることが大切で、それで十分という世界があること。それを歌でやれたらいいと思う」

不信から希望は生まれ得ない。対話を続け諦めず思考する。その原動力となるのが愛なのだと、ピアフの声と音楽は迷いなく訴えてくる。

「絶望からはいあがれるのは、何かを信じ、誰かを愛することができたときだけ。苦しみや憎しみの連鎖から人々を解放する。これが音楽の力なのだとピアフが教えてくれた」

午後1時。ピアノは森丘ヒロキ。5500円。電話03・6431・8186（ムジカキアラ）。

（編集委員・吉田純子）

不信から希望は生まれ得ない。
対話を続け諦めず思考する。
その原動力となるのが愛なのだと、
ピアフの声と音楽が迷いなく訴えてくる。

絶望からはいあがれるのは、何かを信じ、誰かを愛することができたときだけ。
苦しみや憎しみの連鎖から人々を開放する。
これが音楽の力なのだとピアフは教えてくれた。